

## 地域と結ばれた 事例研究プロジェクト について

こどもみらい館が昨年度立ち上げた三つの研究プロジェクトの一つ「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」では、去る10月に保育所（園）・幼稚園が学校や地域の各種団体、行政機関などとのような連携をされているかを把握し、実践例を広く発信するため、「地域と結ばれた事例アンケート」を実施しました。アンケートは、プロジェクトを構成するみらい館の研究・研修部会委員及び今年度新たに発足した「子育てサポート推進チーム」の保幼小連携アドバイザーにより作成されたもので、今後、お寄せいただいた回答を集計・分析し、効果的な取組をされている園・所からの聞き取りなどもさせていただきながら、保育所（園）・幼稚園が地域の子育て支援コミュニティの核として機能できる環境づくりについて調査・研究を進めてまいります。

## 地域子育て支援 ボランティア養成講座 について

保育所（園）・幼稚園の子育て支援事業をサポートし、地域ぐるみの子育て支援活動を推進するため、各園・所で活動するボランティアの方々を対象にした養成講座がスタートしました。

10月13日の永田萌氏（絵本作家・イラストレーター）の開講記念講演を皮切りに、平成18年3月6日の大日向雅美氏（恵泉女学園大学教授・「あい・ぽーと」施設長）の修了記念講演まで、基礎編、実践編各3回と実習等、多彩な内容で実施いたします。




なお、開講記念講演には、73名の皆さんにお越しいただきました。

# Information

## インフォメーション

### 連続公開講座 開催

保育現場における今日的な課題をより深く学ぶため、今年度新たに、連続公開講座を計画致しました。しかも、保育士・幼稚園教諭の養成大学の学生にも門戸を開いた、従来にならぬ形の研修会です。「気になる子どもとのかかわり」をテーマに、昨年度共同機構研修会のアンケートで希望が多かった夜間に、3回連続の講座とし募集したところ、定員（81名）の3倍近くの申込みをいただき抽選とさせていただきます。

- |     |  |                        |   |
|-----|--|------------------------|---|
| 第1回 | 平成17年11月14日(月) 18:30~20:30<br>「子どもの心と向き合うために」                      | 講師・藤原 勝紀氏（京都大学大学院教授）   |   |
| 第2回 | 平成17年11月21日(月) 18:30~20:30<br>「LD,ADHD,高機能自閉症等,特別な支援が必要な子どもとのかかわり」 | 講師・定本ゆきこ氏（京都少年鑑別所法務技官） |  |
| 第3回 | 平成17年11月28日(月) 18:30~20:30<br>「子どもの思いにこころをよせて発達を見守る」               | 講師・西川由紀子氏（華頂短期大学助教授）   |  |

### 共同機構研修会のビデオを貸し出しています 園・所内研修にご活用ください。お申込は、こどもみらい館事務室まで。

- |                                       |            |
|---------------------------------------|------------|
| 平成17年度分 無藤 隆氏 「遊びの中の学びー保育の今後」         | (5月18日実施分) |
| 神長 美津子氏 「保育所・幼稚園と小学校との連携」 <b>NEW!</b> | (7月 2日実施分) |

なお、平成16年度分は、汐見 稔幸氏、藤森 平司氏、帆足 英一氏、西川 由紀子氏、安家周一氏の各研修会が貸出し対象ビデオです。

研究冊子等の提供のお願い | こどもみらい館では、各園・所で取り組んでおられる研究などをまとめられた冊子や紀要を収集・保管し、今後の研究・研修など共同機構の取組の参考にさせていただきたいと考えています。ぜひご提供いただきますようお願いいたします。

### 編集|後|記|

色とりどりの葉っぱを集める親子の姿に和やかさを見つけました。子ども達が育っていく中で保・幼、小の垣根をなくしていこうと、みらい館で連携のあり方について話し合われています。子ども達が次のステップに踏み込めるよう、良い取組にしたいものです。

秋の食材が実る喜びは、子ども達が成長するよろこびと似ています。豊かな実りを願う秋、子ども達にも大きな実りの秋でありますように。

研究・研修部会委員 木藤 尚子（自然幼稚園園長）

発行日 平成17年11月15日  
 発行者 京都市子育て支援総合センター  
 こどもみらい館  
 〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る  
 Tel (075) 254-5001  
 Fax (075) 212-9909  
 Eメール jigyo@kodonomirai.or.jp  
 URL http://www.kodonomirai.or.jp

京都市子育て支援総合センター  
こどもみらい館  
研究・研修だより

# かがやき Vol.5

## 「地域教育フォーラム・イン京都」で 「保・幼・小・中連携」の分科会を開催

夏の風物詩となった「地域教育フォーラム・イン京都」。この研究集会は、学校と地域が連携して子どもたちを育てていこうと、平成11年から取り組まれているもので、今年度は、保幼小中連携をテーマにした分科会「地域ぐるみの子育てリレー～保幼小中とつながる育ちの中で～」が開催されました。

最初に、無藤隆白梅学園大学・短期大学学長から、小1プロブレムの要因には幼児教育と小学校教育の

方法の違いがあり、互いにつなが目をスムーズにする必要があること、保育士・教員は、子どもの成長過程を知り、異年齢交流をそれぞれの指導計画に位置付けて、相互に意義のあるものにすべきこと、カリキュラムの一貫性、家庭・地域との連携の大切さなどについて講演いただきました。

引き続き、シンポジウムでは、保幼小中連携を通して育てたい力は、子どもたちが豊かな人間関係を築く力、生きる力であること、保育所・幼稚園での中学生の職場・奉仕体験が有効な取組であったことなどを出し合い、今後とも、中学校区で保育士・教員が定期的に会合を持ち、就学前から中学生までの子どもたちがふれあう場をつくり、保幼小中連携を継続して、地域で子どもを育てていくことを確認しました。



「地域教育フォーラム・イン京都」は8月22、23日に国立京都国際会館で開催。全国から教職員・保護者等約6,500人が参加。この分科会にも約350人の方々も参加し、熱い議論が交わされました。

- |                         |  |
|-------------------------|--|
| 講演・指導助言                 | 無藤 隆（白梅学園大学・短期大学学長）  |
| シンポジスト                  | 石田 公和（嵯峨野保育園長）<br>新井 道子（京都市楽只保育所長）<br>菅原さと子（聖マリア幼稚園長）<br>田井三智子（京都市立乾隆幼稚園長）<br>井丸 勝子（京都市立伏見板橋小学校長）<br>加藤 博昭（京都市立西院中学校長） |
| コーディネーター                | 岡本 幸己（教育委員会地域教育専門主事）   |
| 総合司会/庄司 尚文（こどもみらい館事業課長） |  |



# 「子どもの心を育てる環境と親教育を考える」



講師・三沢 直子 氏

**プロフィール**／明治大学文学部心理社会学科教授、臨床心理士。長年、精神神経科等で心理療法や心理検査に携わる一方、母親相談などの子育て支援活動を展開。現在も、職員研修やコンサルテーション、地域のネットワークづくりに取り組んでいる。主な著書に「殺意をえがく子どもたち 大人への警告」、「描画テストに表れた子どもの心の危機」、監修に「完璧な親なんていない! カナダ生まれの子育てテキスト」ほか

研修会の当日は、午前中からとても蒸し暑い一日となりました。どんどん気温が上がる中、土曜日の午後にもかかわらず、125名の参加者がありました。

今回は研修会の様子や参加者の声をレポートします。

## 子育て支援の大切さ

三沢先生は、最初に、子育て支援に取り組まれるようになった経緯をお話しされました。

病院でカウンセラーをされていた時、思春期に暴力的となる「キレる子」に接したり、一流企業に勤めて頭は良いのに心が育っていない「新人類」が仕事に適応できずドロップアウトする様子を見たりして、そうなる前に、子どもを育てる時に何が大切かを子育て中の母親と一緒に考えることが必要だと感じられたとのことでした。

そしてご自身が働いていると、毎日いろんな人とかかわって達成感もあったが、母親になると赤ちゃんとの二人きりの生活となり、社会から隔絶されて、孤立感を味わったそうです。

また、赤ちゃんといふれあった経験がないまま母親になる人が大多数で、しかも日常的にアドバイスをしてくれる人がいないという今日の社会状況を見聞きし、1989年に子育て中の母親のためのカウンセリングルームを始められました。そして、相談を受け続けられましたが、砂漠にじょうろで水をまくようなもので、きりがなく、母親のみによる子育ての状況を変えないといけないと思い、ファミリーサポートセンターの設置など、具体的なシステムづくりとその実現に向けての仕事にかかわるようになったとのことでした。

また、7年前、児童虐待の防止も含めて地域の子育て支援のネットワークづくりは、まだ少なかったため、自ら保育所、幼稚園、児童館、学校などの様々な人が集まって勉

強する「コミュニティ・カウンセリング・センター」を立ち上げられたそうです。

## 描画テストが示す子どもの心の変化

三沢先生は、子どもたちに絵を描いてもらい、その絵で心のありようを読み取る「描画テスト」を専門的にされています。

1981年と、1997年～99年に長野や東京で小学生に行った「家」と「木」と「人」を入れて、1枚の絵を描かせた描画テストをスクリーンに映し出されました。

1981年に描かれた絵の8割は、写実的でバランスがよく、きめ細かな観察や大人っぽいスケッチ風のタッチのもの、男女差がはっきりしているもの、元気に遊んでいるところなど、生活が伝わってくる描画でした。しかし、神戸の児童殺傷事件が起きた97年の調査では、想像を超える変化が起きていたとのことでした。人にナイフが刺さって血を流している絵、人間を棒のように無機質にひたすら描いた絵、実に破壊的で構成がちぐはぐな作品などが増えており、私たちも大変驚かされました。また、99年の調査では、昇天する人や雲から手が出ているなど現実と非現実の混合した不気味な絵や、地面の基線がない絵、絵の中のものの大きさがアンバランスな絵などが目立ち、研修会の参加者からは「子どもの絵の変化に恐怖を覚えました」等の感想が寄せられました。

絵の中の「家」は、子どもの心を受け止める場全体を表しているそうですが、年々絵に描かれる「家」は小さくなっているそうです。実際、81年当時に比べ98年には、「家」の大きさは3分の2程度となっていて、このことは子どもの心の受け皿が3分の2になってしまったと考えられるとのことでした。

また、子どもたちの両極化が進んでいるとも指摘されま

した。6年生のクラスに、幼稚園児のような絵を描く子どもと高校生のような絵を描く子どもが一緒にいたり、「人」を小さく描いた、自己を過剰に抑制した絵と、全く抑制が効いていない描き放題の絵があるなど、バランスのとれた普通の子どもの数が少なくなったことをあげられました。

さらに、小学校高学年までに発達が停滞している状態も顕著に表れているとのこと、心が育っていない現状がここからもわかると話されました。

## 子どもの心を育てる環境

心の育ちは点数化しにくく、無視されてきましたが、D. ゴールドマン氏の提唱された「こころの知能指数=EQ」(心から納得できる決断を下す能力、自分自身を励ます能力、他人の気持ちを感じとる共感能力、集団の中で調和を保ち協力し合う社会的能力)や、北海道大学の澤口俊之教授の提唱された、脳の前頭連合野の「脳力=PQ」(しっかりとした目的と計画を持ち、社会的規範と状況に応じて適切な判断をしつつ、言動と感情をコントロールする働き)について紹介されました。また、描画テストとPQの関連性は高く、描画テストでみられた高学年での発達の停止は、PQの発育停止を示すとも考えられ、子どもの心の状況は、かなり深刻な状態だということです。

このPQ(脳力)を発達させるためには、澤口教授によると、普通の環境、つまり豊かな社会関係にさらされること、さらに言うならば、父親からの指導と母親からの愛情を受けつつ、大人や子ども同士で、多様な社会関係を繰り広げる環境が幼少期、少なくとも8歳までに与えられることが必要であり、幼少期にそのような環境が与えられなかった場合は、社会的理性が未熟なまま、感情や欲望を適切にコントロールできない状態が続き、人との適切なコミュニケーションや成熟した性行動を欠いたままになってしまうそうです。

小学校低学年までに豊かな心の発達の土台を築くことが、今、最も大事であり、もはや家庭だけではなく、地域社会全体での子育てが必要で、保育所・幼稚園がそのキーステーションになることが望まれると力説されました。

## 親教育プログラムの必要性

子どもの“豊かな土台”を作るためには、母親自身が孤立せず社会性を身につけ、子どもを多様な人とかかわりの中で育てることが、緊急的な課題であると話された後、先生はカナダで行われている、親教育プログラム「Nobody's Perfect」が大変有効であると紹介さ

れました。

このプログラムは、参加者中心型で、親が安心して参加してエンパワーメントできるように、0～5歳児の保護者10数人と進行役のファシリテーターによって、毎週1回2時間で8回行うものです。

プログラムの目標は、「子どもの健康や安全、しつけについて学ぶ」「すでに持っている子育てのスキルを高め、新たなスキルを習得して練習する」「自分の長所や能力に気づくことによって、親としての自信をつける」「学習しながら他の親と知り合ったり楽しんだりする」「他の親と助け合い、サポートし合える関係を作る」ということで、プログラムの効果判定では、「自己評価が上がった」「抑うつ感が下がった」「育児不安が低下した」などが有意な結果を示したとのことでした。

こどもみらい館でもこのプログラムを今年5月～7月に試行実施しています。

## 参加者からの質問に対して

「4年生後半頃から子どもたちの行動がおかしくなり、発達が停滞するように実感するが、どのように指導すればよいか」と小学校教員から質問がありました。思春期が始まり、今までもっていた価値観などの枠組みが変化していく不安定な時期ですが、この時期にクラスの子どもたち一人一人の心を大切に、教師も一緒に徹底的に遊ぶことで、すさんでいた多くの子どもたちの絵がバランスの良い絵に近づいたという、あるクラスの追跡調査の実例を紹介してくださいました。

「現場の先生の方ってこんなに大きいんですよ」との三沢先生のお言葉が心に残り、子どもにかかわる者が専門性を磨くことの重要性を改めて感じた研修会でした。

【平成17年6月25日】



# 保育所・幼稚園と 小学校との連携



講師・神長 美津子 氏

**プロフィール**／東京成徳大学子ども学部助教授。  
宇都宮大学教育学部附属幼稚園教諭，文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官，  
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官等を歴任。幼稚園教育要領の改訂，  
中央教育審議会幼児教育部会の運営に携わる。主な著書に「保育のレベルアップ講座」，「幼  
稚園教育の新たな展開」，「教育課程総論」ほか

## はじめに・中教審答申

中央教育審議会に幼児教育部会が設置され，義務教育につながる幼児教育の在り方について約1年半審議されました。そして平成17年1月28日に「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」の答申が出されました。

この答申では，今後の幼児教育の方向性として，「家庭，地域社会，幼稚園・保育所等の三者が連携しながら総合的に幼児教育を推進していくこと」と「幼児の日々の生活の連続性と0歳から2歳，3歳から5歳，6歳以降の発達や学びの連続性を確保すること」を掲げています。

そして，幼児教育の充実のために取り組むべき課題と実施すべき施策としては，「幼稚園等施設の教育機能の強化・拡大」に向けた“協同的な学びの取組の推進”，「家庭や地域社会の教育力の再生・向上」に向けた“子育て支援や預かり保育”，「幼児教育を支える基盤等の強化」に向けた“保育カウンセラーの活用”や“幼児教育支援センター事業”などを提言しています。

## 幼小・幼保小の連携のこれまでの経緯

保育所，幼稚園，小学校，中学校，高校などの校種間の連携は大きな課題です。小1不登校や不登校，いじめなどの問題も，校種間の理解不足や子どもの発達に応じた教育環境の接続の不十分さが一つの原因であると思います。

幼児教育と小学校教育の連携に関しては，平成元年に小学校1，2年生に導入された「生活科」が一つの成果です。教科学習が中心の小学校教育の中に，遊びや生活が中心の幼児教育の考え方や子どもの見方，教員の関わり方の視点が加わりました。さらに，小学校3年生以上に「総合的な学習の時間」が導入され，カリキュラムの接続が進みました。

しかし，少子化の進行等によって，子どもの育ち方が変化し，自立性や忍耐力の不足等から，従来の校種間の段差を乗り越えられない子どもが増えてきました。イライラしたりすぐにカッとなったりする子どもが増え，教員のより密接な関わりが求められています。一方，親は，子どもとの付き合い方が分からず，不安が増大しているなどの課題を抱えています。

## 小学校教育との「段差」と「なめらかな接続」

まず，幼児教育と小学校教育は違うということを理解しましょう。幼児教育は，遊びや生活を中心とした環境を通して行う教育であり，小学校教育は，教科を中心に初等教育を施すもので，時間割や履修時間数，評価規準が決まっています。当然，その間には「段差」があるのです。しかし，新しい環境に適応できずに段差を乗り越えられない子どものために，幼小の双方から歩み寄って，適当な段差とし，「なめらかな接続」にすべきです。

そのためには，乳児期・幼児期・児童期で発達や学びの連続性を確保する必要があります。乳幼児期の子どもは，遊びの中で世界をつくり，自己実現の延長上で学んでいます。小学校以降の学習は，文化的な価値あるものに気づくことであり，その基盤は，幼児教育における多様で豊かな体験を通じた学びの中にあるのです。

例えば，5歳児の保育で，子どもたちが牛乳パックと割り箸とゴムでスクリュー付きの舟を作ったとき，子ども同士で作った舟の形を比べたり，上手な作り方を伝え合ったりしながら，舟が動いたら感動するという経験の中で，教師の言葉が少なくても，子どもが協同して価値に気づいていくことができました。

## 幼児期から児童期への教育を展開

### ・幼児理解と教材研究を深める

幼児教育では，子どもの心情や仲間関係の理解を重視しますが，小学校教育では，教材の分析や研究を重視する傾向があります。

例えば，小学1年生の生活科で，秋の虫の生態に触れ，自然の変化と虫の営みに気づかせるという授業を見学したときのことで。用意された虫かごは運動会のテントくらいの大きさで，その中でバツが跳ぶ姿に子どもたちは大きな歓声をあげていました。しかし，指導教諭は，子ども一人一人が虫の生態をじっくり見るという観点を踏まえると，近くで見られる小さな虫かごもあったほうが良かったという意見でした。

小学校を見通した幼児教育を行うためには，このような教材分析も必要となってきます。

### ・生活の広がりや深まりをつくる

近年，少子化や情報化，都市化等の影響で，家庭での子どもの生活体験の差が大きくなり，それが運動遊びなどの発達の差にもつながっています。

幼児教育では，子どもの生活体験の差の埋め方が大事です。単に皆で一緒に経験すれば埋まるわけではありません。一人一人のこれまでの経験に各園での多様な自然体験や社会体験を，少しずつプラスしながら，仲間と楽しんで経験を共有できるように，子どもの積み上げた経験と関連させながら，年間指導計画や教育課程に位置づけて，次にいきていくように広がりや深まりをつくることです。

### ・聴くことと伝え合いを育てる

「話を聴ける子どもに育ててください」と小学校側から言われた幼稚園・保育所側では「子どもは話を聴いている」とお互いの主張が平行線になるパターンがよくあります。

小学校では学級全体で教師の話や話を聴くことが中心ですが，幼稚園や保育所では子どもと保育者が一対一で関心を持って話を聴くことをたくさん経験してからグループで話し合うことに発展させています。

このような小学校と幼稚園・保育所の指導の違いをお互いに話し合える関係が大切です。

## ・一人一人の学びから協同的な学び合い，そして学級全体の活動へ

幼児教育では一人一人の学びが大事にされ，小学校教育では学級全体の活動が中心となっています。そこで，幼小双方の教育の中に，人と関わり合うことで自分の世界が広がっていく「協同的な学び合い」というものがしっかりと位置付くことによって，幼小の学びの違いが埋められていくと思います。

幼稚園や保育所で，協同的な学び合いや活動が，学級全体の活動に展開していくステップはどうなのか。好きな友達の中で偶然生まれる協同的な学びよりも，一つの課題に対して皆で追求していく活動が，5歳の後半に幼児教育として共有されるとよいと思います。協同的な学び合いが大きな課題です。

## 保育所・幼稚園と小学校の連携を進めるために

小学校教師を幼稚園や保育所へ研修派遣したり，幼小の免許の併有を進めたりする取組が各地で行われています。幼小の教育の違いを知ったうえで双方をつないでいける先生が多くなることを期待します。

そして，その連携の成果を共有したいと思います。例えば，ある小学校の先生が幼稚園に1年間入ってみて，子どもが幼稚園で育つ様子がよく分かり，幼児期の体験の積み重ねのうえに小学校の生活が展開できることを理解できたと話しておられました。一方，受け入れ側の幼稚園の先生は，環境の中に意図を込めることを小学校の先生に説明することが難しく，そのために改めて勉強できたと話しておられました。

幼小で積み上げた異なる専門性がぶつかり合うことで真の連携が見えてきます。幼児教育が児童期とつながる架け橋を描いていくことが大事なのです。

【平成17年7月2日】



# 自閉症の基礎概念について



講師・十一 元三氏

**プロフィール**／京都大学医学部保健学科教授。  
 大津家庭裁判所庶務室技官，ケースウエスタン＝リザーブ大学（アメリカ）医学部・児童青年精神医学部門主任研究員を歴任。現在，同大学医学部客員講師，滋賀県こころの教育相談センター顧問専門医も務める。自閉症の療育として，仲間との交流型対人コミュニケーションによる情動安定支援の「サーツ（SCERTS）モデル」を紹介。

## 広汎性発達障害の本質

近年，広汎性発達障害については，知名度が急速に上がり，解説書が山のように出ています。しかし，必ずしも医学的に正確な内容が紹介されていないようですので，今日は，そのベースの部分が，医学的にどう理解されているのかお話しさせていただきます。

精神科医から見ますと，子どもさんが自閉症であったり，あるいはアスペルガー障害…教育の領域では症候群と呼ぶことが多いですが…であったりすると，本人以外に，お父さん，お母さんなどがアスペルガー障害，あるいは，特定不能型広汎性発達障害の診断がつくことは稀ではありません。

そうなると，私たちは，子どもさんを支援する上で，親御さんの特質まで踏まえてコミュニケーションして支援しなければならない。また，親御さん自身がこういう特質をおもちだった場合は，心情的サポートはかえって混乱を招く場合があります。むしろ正確な知識を専門家に伝えるように話したほうが理解してもらいやすい場合があります。

以前よく，発達の影響で2次的に障害が出たのが自閉症やアスペルガー障害であるという誤解がありましたが，これは完全な間違いです。言葉を習得する重大な臨界期に言葉を教えられないで育ったために言葉にハンディキャップが生じた，というような場合は「発達“性”障害」です。しかし，自閉症，アスペルガーなどの「発達障害」は学習環境の影響で生じた障害ではありません。もう一つの大誤解は，心因論です。お母さんの不適切な養育が原因ではないかと考えられたわけですが，これらは両方とも完全に否定されています。

## 広汎性発達障害の定義

広汎性発達障害とは，「生得的な脳機能の問題」です。それが「発達に広汎な影響を及ぼし，認知や行動に独自のハンディキャップが生じている状態」と言えます。さらに，ハンディキャップが最も生じやすいのは，「対人相互的反応性」と診断基準上規定されています。これは，人から教えてもらわなくても獲得していける生得的な反応ですが，1対1，あるいは集団場面で，情緒的な相互性が求められるときに，コミュニケーションが相互発展的に進まないハンディキャップが存在する。そういう定義の仕方です。

「広汎性」の反対は「特異的」です。学習障害がまさにそう

です。対人関係も数学もよくできるのに漢字の読みだけが学習できないというような，ピンポイントで影響を受けている障害です。広汎性発達障害はこれとはまったく性質の異なるものです。

## カナーとアスペルガー

精神医学の歴史の中では，自閉症，つまり発達障害が一番最後に見つかったものです。そのきっかけは，1943年，アメリカのジョーンズ・ポプキンス大学の児童精神科医，レオ・カナー教授の報告です。診察した11名のお子さんに，共通して見られた生まれたときからの顕著な孤立。あやしに対して反応しない，抱っこしようとしても構えがないなどです。また，全然喋らない，オウム返しや高度な言葉を喋るがコミュニケーションとして使っていない，自分用の言葉として一人で喋っている場合が多く，相互交流としての言語になっていない。これらのことにカナーは注目しています。

さらに，同一性保持。部屋の中で，ものがいつも同じ場所にないとパニックを起こしてしまう。一日のスケジュールがちょっと狂うと動揺してしまう。その一方で，ある種の記憶力が抜群で，モノにすごく関心を向けるなど，今で言う典型的な自閉症のお子さんの状態がすべて書き尽くされている感じでした。

その翌年，ウィーン大学病院のハンス・アスペルガー医師の報告も，カナーと非常に共通しています。視線がどうも不自然である。言語使用が独創的だ。こだわり，固執傾向がある。AD/HDのような多動傾向とかステレオタイプ行動の繰り返し，文字よりも数が好きだという特徴や人によく接近するとも書いています。性倒錯傾向があるということにも触れています。女装をしたり，少年が他の少年に性的な接触をしようとしたりということでした。

わが国の取組は，カナータイプの自閉症のお子さん，あるいは青年期までの方を中心としていました。そうすると，自閉症の人というのは「余り喋らない」「人を避ける」「いや，誰彼かまわずついていく」とか，「際限のない繰り返しが問題だ」「感覚，知覚の不安定，感覚統合の問題が目立つ」「こだわりが一番の足かせだ」「多動の方が問題だ」…この辺が，自閉症の少年をケアする側のリアリティだったと思います。

また，学童期になると，学校には来るが，うろうろしてしまうとか，高機能自閉症のお子さんが注目されると，授業中

は大丈夫だが，運動会や文化祭になると大問題が起きる，遠足になると担任の先生も大変だと…こういうレベルの問題に変わってきます。

広汎性発達障害をもつ割合の推定値は0.8%であると文部科学省の統計にあります。1%前後となりますと，同僚にいても当然なわけで，私たちにとって日常的に身近な問題だというのが正しい認識だと思います。支援者側にも同じハンディキャップをおもちの人がいるということを忘れてはならないと思います。

## 広汎性発達障害の特徴

「自閉症，アスペルガー障害とは，『社会性』とか『コミュニケーション』『想像力』の問題」とする解説書が多いと思います。しかし，高機能自閉症のお子さんはごっこ遊びもします。すると，想像力に問題はないと見えますし，アスペルガーの人は多弁や雄弁なケースも多いです。するとコミュニケーションも一見問題ないようにみえる。挨拶もきっちりし，礼儀正しく座席を譲る人もいますので，社会性もあるということになって診断の見逃しになったりします。

本質的には，「相互性」が十分ないことが問題です。コミュニケーションが一方向的。あるいは，過度に論理的，分析的になったりする。高機能自閉症になると，スキルとして，頭で獲得した社会性はよく身に付くのです。もう一つ大きな特徴は，「こだわり…強迫的傾向」です。この二つが幼児から大人まで，あらゆる広汎性発達障害の特徴であると位置づけられてます。

また，小学校，中学校になると不適応が重なった場合「被害関係念慮」という被害妄想の前駆症状のような状態がよく出ます。うつ状態になってしまうということもあります。これは注意すべき問題です。

## 広汎性発達障害の原因

原因についてはいくつかの仮説があります。カナーやアスペルガーは，最初，知能や認知の問題ではない，情緒的なもの，情動的なもの，あるいはより本能的な部分で何かの相違があるのではないかと推論しています。他に，言語とか認知処理がうまくできていないから自閉しているという仮説や，その派生で「心の理論の障害」（他人の考えが推論できないこと）という心理仮説もありましたが，これらは医学的に妥当ではありません。

また，神経学の研究者は覚醒が過剰だと，過緊張状態ではないか，あるいは，小脳の問題であるとか，自分の行動をコントロールする前頭前野の問題ではないか等の説がありました。そして，最後に出てきたのが，扁桃体・辺縁系障害説です。亡くなった人の脳を顕微鏡で丁寧に調べると，一番異変が見つかったのが，扁桃体という場所です。扁桃体は大脳皮質下にあって，感情というよりももっとベーシックな，緊張とか恐怖とかに反応しています。この扁桃体を出発点とする「パペットの感情回路」という部分の神経成熟が停滞しているという所見です。すなわち，認知よりも奥に潜む対人的反応性や，情動の制御とか，注意，関心の問題に，私たちと違う特徴をもっていると考えた方がいいと思います。

児童精神科の専門医以外を受診した場合，アスペルガーの少年がLDと言われた，あるいはAD/HDと言われたということがよくあります。しかし，実際に起きている問題が対人的

なトラブルである場合，大抵はアスペルガー障害や特定不能型広汎性発達障害のことがほとんどです。専門医に確実な診断を一度受けることが，その後の方向性を考える上で有効です。特に保育士さんや教員の方は日々子どもさんを現場で見ているわけですから，専門医のところに行って情報を提供していただくと，合併症も含めた診断につながると思います。

## 様々な療育論

療育論はほとんどアメリカで出されたものです。60，70年代には，UCLAの心理学者ロバース氏が，自閉症には行動療法がいいと論じました。有名なABA（応用行動分析）です。また，同じUCLAの作業療法士エアーズ氏は，感覚が統合されていないため対人関係に支障が出ると考え，感覚統合（Sensory Integration）という方法を提唱しました。脳幹網様体とか視床とかの深いレベルを活性化して，感覚にまとまりをつけていこうという考えです。ABAを現代版に修正したのもあります。また，ABAに視覚支援などの手法を盛り込んだのがいわゆるTEACCHです。高機能自閉症の人が注目されてからは，認知スキルを覚えさせていこうというものも出ました。そして，90年代，新しく出たのが発達論的療育論という第3世代モデルです。第3世代モデルは，まだ日本に入っていないですが，子どもが実際どう発達しているかを実証的に観察し，他の子どもたちを媒介として発達を促すものです。これが最近の療育論の流れで，その代表例がサーツ（SCERTS）モデルです。

また，パニックを起こしかけたときに，携帯電話を使って自分が落ち着く模様の画面を出す人もいますが，これは，一つの自己鎮静化の技術です。お子さんの場合でも誰かにしがみつくことで鎮静化できたら，より対人相互的な関係に発展します。非常に良いプログラムなのでわが国にも早く導入されたいと思います。ただし，技法がマニュアル化できないこと，熟練を要すること，具体的なプログラムメニューとの関係をどうするかという問題があります。

今あるプログラムを大雑把に捉えた場合に，TEACCHとかABAはむしろ中等度の精神発達遅滞をもっている人によく適しているかもしれません。認知スキルは高機能者が中心で，発達論モデルというのは両者のレベルに対応できると思います。感覚統合は，その人ごとに年齢に応じた工夫が必要になると思います。

ただ，一番の悲劇は，プログラムがどれか一つだけと限定されることです。広汎性発達障害の理解が先行すべきであって，メソッドが先ということは絶対ありません。早くいろいろなプログラムが入って，バランスが取れていくことを願っています。

【平成17年9月8日】

